

武蔵野大学国際総合研究所「第40回 EU 研究会」議事録

- 開催日：2018年11月28日
- 会場：武蔵野大学有明キャンパス会議室
- 基調報告：森井 裕一（東京大学大学院総合文化研究科教授）
- テーマ：「流動化するドイツ政治と EU のゆくえ」

基調報告：「流動化するドイツ政治と EU のゆくえ」

1. メルケル首相のキリスト教民主同盟（CDU）党首続投断念を受けて流動化するドイツ政治

- ・2017年9月の連邦議会選挙から半年経ち、ようやく2018年3月にメルケル第4次政権が発足した。
- ・メルケル政権は2005年から13年の長期政権であり、党首としては18年という長さ。しかしその間に経済・社会状況やドイツを取り巻く環境は大きく変化し、長期政権に対する不満や不信も高まっている。

2. バイエルン州選挙での敗北

- ・2018年10月バイエルン州議会選挙での CDU の姉妹政党キリスト教社会同盟（CSU）の歴史的な大敗。
- ・バイエルン州は伝統的に非常に保守の地盤が強く、選挙では CSU が単独過半数をとるのが当然と考えられていたが、今回の CSU の得票率は 37.2%で、自由民主党と「自由な有権者」の 2 つと組んで連立政権を維持。
- ・社会民主党（SPD）は前回 20.6%→今回 9.7%と大きく減らした一方、緑の党は前回 8.6%→今回 17.5%と SPD を上回る結果になった。
- ・ドイツのための選択肢（AfD）は 10.7%を獲得し、バイエルン州議会で初の議席獲得。他州に比べると大きくなってはいないが、これまでは政治スペクトラムの右側は全て CSU がカバーしていたのが、更にその右側に政党が出現してきた点は懸念に値する。

3. ヘッセン州議会選挙での敗北

- ・2018年10月ヘッセン州議会選挙でも CDU は前回 38.3%→27.0%と大きく議席を減らした。
- ・SPD はここでも前回 30.7%→19.8%と退潮傾向が止まらない一方、緑の党がその分、前回 11.1%→今回 19.8%と得票を伸ばしている。
- ・AfD は 13.1%の得票で議席を獲得し、これでドイツ全 16 州に議席を獲得す

ることになった。

・ヘッセン州もバイエルン州も非常に経済状況が良く、政策面での州の政権に対する不満はそれほどないにも拘らず政権を担っている CDU が大きく負けるというのは、州議会選挙がメルケル政権への不満表明の機会になったと考えられる。

4. 政治運営の失敗か構造的要因か？

・EU 諸国はどこでも、二大政党制ないし連立政権の中核となってきた包括的政策を有する政党が縮減している。これまでドイツはその趨勢の外であったが、SPD の退潮とバイエルン、ヘッセンでの CDU の敗北は、ドイツでも他のヨーロッパ諸国と同じようなことが起きていると示している。

・ドイツの政党システムの変化（連邦レベル）は以下のようにになっている。

1950 年代～CDU/CSU、SPD、FDP 3 党システム

1983 年 緑の党が加わり 4 党システム

2005 年 左派党が加わり 5 党システム

2017 年 AfD が加わり 6 党システム

5. ドイツ政治の流動化のもう一つの背景：SPD の衰退

・2017 年初頭にシュルツ前欧州議会議長が SPD 首相候補となってドイツ内政に戻った数週間を除き、SPD の退潮傾向が続く。

・それにも拘わらず、政治の安定、選挙の回避のためには大連立以外にオプションがない。

・政権の SPD 色の強い政策展開が十分なされない現状での選挙で回復の見込みはない。

・雇用を柔軟化したことにより社会的格差が開くことになった原因を SPD が作った（シュレーダー改革）という過去を乗り越えるような新しい基軸を出せていないことが問題。

6. AfD とドイツ政治

・安全保障をめぐる社会規範、思考・行動様式に変化はないが、AfD により議会内でもすさんだ議論も増加してきている。

・AfD は社会的敗者による不満を集める政党と捉えるよりは、ドイツ政治の変容を象徴すると理解すべき（支持者層、投票行動の変化）。

・但し東ドイツ地域では移民排斥的な動きをする極右的な社会運動とセットになって圧倒的な支持を得ているので、その点は今後のドイツ政治の大きな不安要因となる。

・ネオナチ的発言など、戦後ドイツが許容しなかった失言などが続いても、支持が大きく下がらないことにも留意すべき。

7. 次期 CDU 党首選

・アネグレート・クランプ＝カレンバウアー (AKK) CDU 幹事長、フリードリヒ・メルツ CDU 元院内総務、イエンス・シュパーン保健相の 3 名が候補者。

・CDU 支持者の世論調査を見る限り AKK 有利だが、党首選は代議員による投票のため、予測は難しい。AKK が党首になれば、メルケル首相の任期末までの継続は容易ではなく、大連立政権の維持も容易でない。

・どの候補も「EU 中のドイツ」という視点を強く持ち、規定路線の継続になる可能性が高い。

8. 展望

・ドイツ政治の停滞と経済構造改革の遅れるフランスによる Brexit 後の EU の運営は、予想以上に困難。

・ドイツ政治の流動化は容易には収束しない (CDU の党首選の結果次第で政権の求心力が下がる可能性がある・SPD の退潮・複雑な連立のリスク)。

・好況が続く間に、さらに強靱な経済社会のための構造改革を進めるリーダーシップがとれるか否かが次の連邦議会選挙までの課題。

質疑応答およびディスカッション

■ CDU の次期党首により、極右支持者の票をとろうと CDU が右に寄っていくことは考えられるか？

戦略的に軸を右に移して AfD に流れた支持者を取りに行くことは可能だが、それをやってバイエルンの選挙ではっきりと負けた。AfD 支持層を取りに行くということは、常に、緑の党に流れる人を増やすということ。右側を取りに行くと左側を失っては意味がないので、両側から求心力を持たせるように議論を展開し、真ん中で戦っていくというのが、候補者 3 人の共通認識。

■ CDU と SPD の二大政党制だったのが、多党制になるのか？

二大政党制は良くも悪くも話が早かったが、多党制ではプレイヤーが多い分調整に時間がかかり、政策を決めるのに時間がかかり停滞的に見えるかもしれない。しかし AfD にも現実的な人もいるので、それほど停滞するということもないのか？

出てきた政党が消えていくということは十分あり得る。FDP が議席を失ったこともあるし、緑の党も今は好調だが、ドイツ統一の後は実質的になくなっていた。しかし今の流れを見ると、構造的な背景があるのでそう簡単に消えていくとは思えない。今ある政党の数で、連邦レベルでもしばらく続くのではないかと思う。

連立政権がずっと続いていたと言っても、ドイツの場合は大きな政党と FDP か、大きな政党と緑の党の、今までは大1、小1で良かったのが、多分これから大1、小1では50%いかないの、大1、小2が必要になる。3党で連立を組んで政治をやったことはないの、難しくなる。

問題なのは数ではなく、緑の党と FDP は政策距離が非常に遠いというところ。つまり、真ん中にある CDU か SPD が、右側と左側にうまくウィングを伸ばして連立を安定させなければならないが、非常に難しく、これがドイツ政治を停滞させる要因になる可能性は非常に高い。

緑の党は現実的になっているので十分安定した政権を運営できると思うが、FDP がリントナー党首のもとで、独自色を出すために、想像以上に政策エゴを前面に出して（ジャマイカ交渉失敗だけでなく、州のレベルでも）、これが妥協を難しくしている。基本的に党首個人が党の政策に強く影響を与えているので、党首が変わらない限り、そう簡単には変わらないのではないか。FDP の出方が難しいのでプレイヤーが多くなり、且つ中の政策の主張が強くなったので難しい状況がしばらく続くのかなと思う。

AfD と手を組まないというのは基本的にどの政党も非常に強く出していて、その原則は、連邦では壊れないと思っている。

但し、東ドイツのいくつかの地方組織では、AfD が実質的に半分くらい握っている地域があるので、CDU の人も AfD を無視できなくなっていて、何等かの政策協力はやるべきじゃないかと言う地方の政治家もいる。それは今のところ連邦のところで抑えられているが、今後どういうふうに展開していくかは、非常に注目に値すると思う。だから来年の3つの選挙で、その勢力を抑える形ではないかと、東の地方のところから、この AfD の排除・除外が崩れていくのではないか。

もしそれが崩れても、かつて左派党が地方政治を経て安定的なパートナーになってきたというのと同じような道を歩み、AfD がだんだん普通の政党になれば問題ない。しかし、旧東ドイツ地域の AfD のかなりの部分の中には、明らか

にネオナチの人達が入っている。それを排除しながらきちんとした政策主体の政党に転換していくというのは、連邦で AfD を運営している人達がやらなければいけないが、どうもそういうふうには動いているようには見えない。先行きは不透明だと思う。